

エゾマツ



大雪山の春

No. 44

1998. 3. 30

北海道ボランティア・レンジャー協議会

1. 巻頭言 春の息吹を仲間と感じて	会長 大友 健	(1)
2. ボランティア活動		(3)
3. 平成8年度と平成9年度を振り返って	佐々木幸夫	(4)
4. 任期を終えて	研修部	(7)
5. 2年間の活動を終えて	広報部	(8)
6. 会員の声		(9)
7. 本の紹介		(11)
8. 笹・ささ・ササ	川端 功治	(13)
9. ボランティア・レンジャー協議会の発展を願う	田村 允郁	(19)
10. 観察会研修会情報		(26)
11. 編集後記		(29)

春の息吹きを仲間と感じて

会長 大友 健

3月の半ば、スキー客20名を乗せたマイクロ観光バスは、ニセコ山系より遠くなりつつ、里山地帯を走り続けている。

当然の多雪地帯だが、もう春の陽ざしを受けてかアスファルト路面が多く見られ、車内の私たちにも充分眠気を誘うのである。

話し声も小さく、しづかな車内になり始めたころ、隣席の女性と車窓より遠景、近景を眺め、小さな春を見いだそうとしている。

感動のつぶやきを、聞くともなく耳にして、私もいつか同じ感動を心に受けていた。近くにとらえられる、ツリーウォッチングである。

樹木の生育機能を有する冬芽、活力ある冬芽こそ陽ざしを受け、生理作用の営みで膨らみを増して、好条件で開じょ、開葉、開花と順をおって成長活動に移行していく過程を、外観的にとらえられるのである。

3寒4温の季節の今は、樹木の成長活動は休眠中であり、幹内は脂肪質を多くしたまま寒気に耐えているが、下旬には生態的な生理活動にはいるであろう。こんなことを考えながらいたとき、ヤドリギを目にした女性から話しかけられた。

風景はとても素晴らしく、居眠りはもったいないと言っていた方だけに、自然志向タイプであろうと思っていたとおりである。

ミズナラの大径木に見られる、「ヤドリギ」がとても不思議だったとのことである。落葉している広葉樹に、どうして緑の小型木が太い枝についているのだろうかとの質問である。

私は、他の樹木に寄生する常緑樹で、自身でも葉緑素をもち光合成する生態で、雌雄別株で花も咲き、赤か黄色の実が生ることも話した。すると彼女は野鳥に結び付け理解の度を深めたのである。

彼女は、しばらくして一般に「ヤドリギ」は、高い位置と太い枝が条件のようだと、聞いて来たのでうれしく思ったのである。

落葉期の今は休眠期だが、親木に葉が繁茂する時期を考えると、光合成の作用を活発にしようとするために、高い位置を選び太陽の陽光条件のよかった結果の発芽、野鳥が粘性の強い排せつ物を、こすりやすいのが太目の枝だろうと話すと、深い理解を私の推理であるが、笑いの中で示してくれた。

私から、粘性の強い実であることと、赤く熟す実と、うすく黄色に熟す実の2種類があることを見つけくわえた。

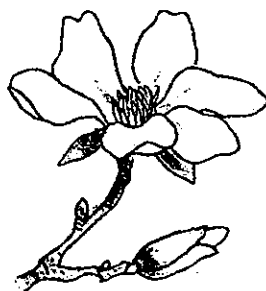
沈黙が続いてから、親木にたくさん寄生したらと聞いて来たので、「ヤドリギ」の自殺と呼ばれる訳を話し、自然の共存にもルールのようなものがあるのではと笑いあった。

私は、調子に乗った感じで、遠景の山並み、地形そうして降雪量の関係、そこから森や、川や、海の連鎖を、豊かな食物共同体関連からも理論づけ、自身がようやく「木を見て森を見ず」の理解に到達し始めた程度と言った。

彼女は、今日のスキーの先生は本職何ですかには、ごまかすことなくリタイヤして自然に興味、関心があるから、感受性と想像力が生まれるし、好きだから楽しい活動として、ボランティア、レンジャーをしていると話した。

彼女も、今度は自分から無農薬野菜栽培の実践やら、名も知らぬ野の花を愛でる話で私を車中楽しませてくれた。

バスの、到着地近くなったので、共に身近な自然と親しみ、自然の有り難さを人々に感じ理解していただくため、貴方のような人のボランティア、レンジャーを、仲間にもちたいと強く行政の呼びかけに応募するようお願いした旅でもあった。



ボランティア活動

昨年1月7日、山陰沖でロシアのタンカー「ナホトカ号」の重油流失事故がありました。重油に汚染された海鳥のうち、苫小牧植苗のウトナイ湖サンクチュアリーに運ばれたものを、再び海に帰すためのボランティア活動が行われましたが、その活動に参加した友人から活動の様子を聞き、報告書を読ませてもらう機会がありました。

鳥のリズムに合わせた救護活動と作業の配分時間など、参加者の状況や活動の苦勞が活字の合間から読み取れてきます。あとがきに「…直接関われなくても、心配して下さった皆さん。心をくだいて下さった皆さん。ありがとうございました。…」の一節があります。ボランティア活動の真の心は、する人しない人というような上下関係で語るのではないことは勿論、自己のやむにやまれぬ行動が謙虚な心となって表れるのでしょう。

ボランティア活動には、公共性、無償性、自発性、創造性が求められると言います。ボランティアの名を冠する私たちの会も、活動の節目にあたり改めてこのことを考えてみたいものです。



1月以降の活動

- 1月 8日(木) ・森林公園事務所主催「1月の森の観察会」協力参加
- 1月10日(日) ・広報誌「エゾマツ」43号 発行
- 2月22日(日) ・「野幌の冬の森」自然観察会 10:00~12:00
(下見 2月15日)
- 3月22日(日) ・森林公園事務所主催「冬の森の観察会」協力参加
大沢口 9:30~14:00 (下見 3月15日)
- 3月30日(月) ・広報誌「エゾマツ」44号 発行
- 4月 1日(水) ・役員会 於：かでの 2・7

平成8年度と平成9年度を振り返って

副会長・事務局長 佐々木 幸 夫

1998年も2月下旬を迎えると、この朔北の地にもめっきり春の徴しが感じられ、何かしらその春が急テンポで近づいて来ました。会員各位にはおかれましては、元氣でお忙しい毎日をお過ごしのことと思います。

ご承知のように4月11日(土)、北海道ボランティア・レンジャー協議会の第13回定期総会が、「かでの2・7」で開催されます。この通常年に1回の定期総会は組織として一番大切な会議で、過去1年間の仕事とこれからの1年間の仕事を決める重要な集まりですから、ひとりでも多くの会員の参加が、より会の発展につながる意見・希望などが出るものと受け止めとめています。

とくに、今度の定期総会は役員の改選期にも当たりますし、10周年記念事業も無事終わりました、これからが真にわたくしたち組織のボランティア活動が、世に評価される時期に入って来たものと思いますので、事業の計画など慎重に吟味する必要があります。

それにしても会が、その前身である「エソマツ会」を先輩諸氏のご苦勞されて、昭和62年(1986年)12月6日に設立し、以降今日に至っている過程を、わたくしは厳しい自然界にある、高木性の樹木の生長を思わせるのです。平成8年が設立10周年としての大きな節目に当たり、その記念行事として「エソマツ10周年特集号NO.38」や、「野幌森林公園自然観察ガイドブック」を平成9年に発刊することが出来ました。広報部を中心として関係者に大変ご苦勞をかけたが、組織全体から見ても成果があったものと理解し、改めて先輩諸氏のご努力と、会員各位からの躰金までお願いしました協力の、心から感謝いたしております。

さて、この平成8年度と9年度を振り返ってみますと、何と言っても会設立10周年記念事業が大きな目玉でした。その中で本来の会の目的とする業務も、総会で承認された事項は会員各位のご協力によりまして滞ることなく実行できました。

「野幌森林公園自然観察ガイドブック」は1,000冊印刷し、現会員と平成7年度から現在に至る間に退会した会員に優先して送付した後、会に関係のあった機関・

団体・個人あるいは会に関心があって照会のあつた団体・個人にお礼とPRを兼ねて配付し、さらに、北海道野幌森林公園事務所に200冊の販売、開拓の村・北海道開拓記念館文化振興会売店に依託販売100冊をお願いし、現在事務局長宅に保有している215冊は、会報第43号でお知らせしたように会員の知人・友人の希望がある場合1冊500円で頒布する分と、今後の新会員用とします。

会の中核となります自然観察会につきましては主催・協力を問わず、なるべく多くの会員と一般の方のご参加を願い、自然保護思想の普及・啓発の場が多くあるように努力してきました。にもかかわらず、今一反応が弱いように思われますので、さらに反応を高める工夫が必要でしょう。今後は、より研鑽に務め自然観察会が自他ともに魅力あるものにする事や、さらに商業新聞のご協力を得てPR願うことも必要です。

しかし、魅力ある自然観察会が高い水準を狙う意味ではありません。わたくしたちは学者でも専門家でもなく、一介のボランティア・レンジャーです。また、指導者でも教育者でないのです。ボランティア活動として継続することが大事で、一般参加者とともに楽しみ、常にその参加者に、その森の余韻を残す必要があります。

会員のなかには、自然観察会のネーミングで、あだかもマンネリ化しているやの言もあります。年々日々時々刻々変化のある自然界で、何を学ぶかその姿勢が問われます。いずれにしても、一般参加者がその自然観察会に参加されて「良かった。また、参加しよう」そんな気持ちになれば大成功です。

しかし、成功することは良いのですが、失敗することも今後の自然観察会に活かされる筈ですから、それはそれで良しとすべきでしょう。臨機応変に対応するなかで、一般参加者の秀でた説明の言葉にも耳を傾けるのもよしですが、大切なことは、グループの責任を持っていることを忘れてなりません。折角の自然観察会に、事故が発生しないよう細心の気配り、目配りが大事になります。

自然観察会の場も、現在、自然公園野幌森林公園に拘泥せず他地域の会員の協力で開催していますが、今後より多くの他地域居住会員の協力をお願いし回数を多くすべきものと思っています。

現在会員数180名のうち、石狩支庁管内に105名で全体の58.3%、さらにそのうちの74.3%の78名が札幌市に居住しています。全道組織でありながら、

札幌中心の事業に偏寄っていないかと思われる会員もおられるでしょうが、この会員の地域構成と、世界にもその類がないといわれる野幌森林公園をフィールドにしている意味も、ご理解願いたいのです。

今後、よりこの会の目的達成を図るためには、石狩支庁管内、札幌市でも支部を結成し、肌理細かな活動をすべきだと思っておりますが如何なものでしょうか。

また、現在会員のうち、数回会費の納入を督促したにもかかわらず、何の音沙汰がない場合があります。会則では、その意志表示が曖昧ですので、明確にする必要があります。さらに、社会的背景の流れと会の熟度で、会則の目的も大分前から変わっているのにお気づきでしょうか。その他、地方幹事の位置付け、会に貢献度が高い個人・団体に対する表彰など会則改正が必要で、その目的達成のために、自然観察会を中心にしながら、さらに付加価値を高める事業の新設も必要でしょう。このように会としては、まだまだその運営上で改善を要する点があります。

平成9年度には成田伸一会員から、会旗5枚、会腕章を100枚ご寄贈くださいました。改めてお礼申し上げます。

いずれにしましても、会の運営は適切な役員のリードが必須要件で、それを組織立てた事業を推進することになります。

また、ごく当り前のことなのですが、ボランティア活動をするためには常に家人の絶対的な協力が必要です。したがって、今日この会があることは家人の協力のお蔭と理解し、感謝しなければなりません。

種々の改善点あるといいながら、地道に発展しつつあることも疑いを持ちません。ここに会員各位のご推轂を頂きながらも、解決出来なかった点につきまして、さらなる努力が必要と自責の念を痛感します。

今後は、より一層の会員のボランティア活動に対する認識の高揚と、より緊密な連携・協力のもとに、ますますの会の発展をさきに触れました樹木がさらに高木となり、巨木の母樹になるよう期待し、会員各位の協力に感謝申しあげお礼とします。ありがとうございました。

(1998. 3. 10 記)

任期を終えて

研 修 部

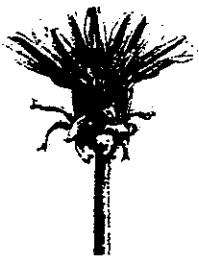
平成9年度の主催・協力事業（自然観察会）も、ほぼ予定通りに終了することができました。観察会の回数は年々増加し、平成2・3年の頃は年に4、5回程度だったと記憶していますが、平成9年度の回数を改めて数え直したところ、なんと17回。これは我々が主催・協力した主な観察会だけを数えたもので、他の団体からの依頼により協力したスポットの観察会を含めると20回以上になります。

野幌森林公園を中心に行っていた観察会も、最初にニセコに足を伸ばし、続けて恵庭、真駒内（札幌市南区）、滝野（札幌市南区）、利根別（岩見沢市）、宮城の沢（札幌市南区）と行動範囲は広がる一方です。平成10年度はさらに旭川方面と小樽積丹方面でも観察会をする予定です。

いずれにしても、大きなトラブルやケガ人を出さずに自然観察会を行えたことは、観察会をいつも手伝ってくれる会員の皆様や、野幌森林公園事務所をはじめとする役所や、各団体のご協力があればこそと感謝いたします。

2年間、ありがとうございます。

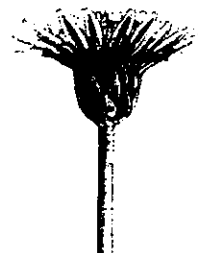
（文責 五十嵐 一夫）



セイヨウタンボロ



アカミタンボロ



エタンボロ

2年間の活動を終えて—活動の反省と課題—

広 報 部

平成8・9年と2年間にわたる広報活動の節目に「エゾマツ」No.44号を予定の期日にお届けすることができました。この2年間、計画した期日には必ず発行していこうという責任を果たすことができましたことに、広報部員一同安堵しています。

発行期日はさておき、No.37～44号までの内容については、企画通りの編集にならなかった等々幾つかの反省点が残ります。

この2年間の広報活動を進めるにあたって、次の点を編集の基本と考えました。

◆できるだけ多くの会員の声を反映させよう。

毎号「会員の声」のコーナーを設けました。各号20名の会員に原稿を依頼しました。37号から44号までに掲載させていただいた原稿は26通、また入会会員に依頼した「新会員の声」については、22通掲載しました。

◆自然や環境を考えるキーワードや参考書籍を紹介していこう。

観察会の結果報告ばかりではなく、内容を多様化しようと考え、その時々々の話題を掲載しました。

◆観察会・研修会情報を発信していこう。

会員の資質の向上につながる情報を整理して掲載しました。全道各地で行われている情報までは手がまわりませんでした。次年度の課題です。

広報誌というものは、多くの会員の意見、主張、感想、報告、情報等によって紙面がうめられていくのが理想です。しかし、文章を書くという作業は、ともすると億劫になりがちです。手軽に気後れせず投稿していただける工夫しなければと考えますし、会員の協力をさらに望みたいものです。

会員の資質の向上に関連して、会員一人ひとりが学ぶべきことは、自然に関する知識はもとより、自然に対する価値観の確立等多々あります。その中で、広報の役割をしっかりとおさえ情報を発信していくことが、広報部に与えられた使命だと思います。「広報」それは「ひろく（広）」そして「しらしめる（報）」ことでもあります。次年度の広報部に改めてこのことを考えてほしいと思います。（文責 田村九郎）

会員の声

恵庭市 小林 英世

春の気配が感じられるこのごろ、冬の観察会に行っていなかったので、天気誘われて、恵庭公園に行ってきました。

鳥たちは、すでにパートナーを決め、春の準備に入っていました。またユカンボシ川の源流部を歩いてきました。早いもので、もうドクゼリの芽がでていました。

最近読んだ本で「群れの科学」大ききの調節機能という本に、大変気になる文章があり、今の中学生の行動が集団圧に耐えられなくなった現象と思われると感じ、人も生物の一因と感じた。

帯広市 池田 啓介

自然観察にふさわしい季節になり、小鳥や昆虫、野山の芽が一度に動きだし、自然界の賑やかさを観察できるよい機会である。

私たちは時間をみては現地に行くことが多くなってくる。分からなかったこと、確認できたことなどで、自分の観察に必要な知識や経験が観察会を多くの人々に広めていくときである。

十勝においても自然環境に目を向け、自然の良さ、自然の姿をさぐりながら自然を守っていく仲間を増やしていくよう頑張らなければと、ボランティア・レンジャーの研修の機会を作っていきたいと思う。



昭和47年発行の釧路市郷土読本 くしろ（小学校3・4年生社会 副読本）に“川上のあたりは、じめじめしたでい炭が、はてしなくつづいています。「この土地をきり開いたら、どんなにすばらしいだろ。」とか「自然のままのすがたで残しておくべきだ。」などと、いまいろいろな意見がでています。”と、釧路湿原にふれた記述があります。

その釧路湿原が、昭和62年には、豊かな自然と生態系の保護保全を全面に押し出した我が国第28番目の国立公園として誕生しました。

自然観察会の地方開催に期待する

上川地方幹事 野 呂 一 夫

過日、研修部のほうから「フィールド情報提供のお願い」という文書を頂戴しました。それは、「平成10年度の自然観察会を道央地区だけの開催にとどまらず地方にも展開していきたいので、上川地方の情報提供をお願いしたい」というものでした。確かに今日まで、観察会は道央中心に進められてきています。しかし、例えば会員の約66%が石狩地方ということだけから見ても、それは致し方のない側面があると思います。

地方での開催には、幾多の隘路がありましょう。しかし、それは会員の視野を広め、研修が深まることは間違いありません。更には、地方会員の意識の高揚や、組織の充実にも寄与することになるでしょう。そうした意味において、地方開催には諸手を挙げて賛意を表したいと思います。

※

上川は、現在8名の会員です。会としては、お互いに情報を交換し合っておりますが、組織だった特別な研修はしておりません。しかし、もしも本年度、上川地方で自然観察会が開催されることになれば、可能な限り支援させて頂きたい。そう考えているところです。



木村 盛武 著

北の魚博物誌

北海道新聞社 1997. 9. 17発行

定 価 1500円(税別)

1月下旬の週末に石狩管内新篠津村の篠津沼（石狩川の旧河川）へワカサギ釣りにでかけました。まずまずの天気でした。氷に穴を開け、小さな針に小さな赤ムシの餌を付け、あたりに合わせて糸をたぐりますと、10分前後の銀白色のワカサギが上がってきました。ところで、次の文字の読みがおわかりでしょうか。

鰯 公魚 若鷺 甘鷺 尼鷺 白鷺 雀魚 桜魚 年魚
凍魚 氷魚 鮎 鱒 鮠 鱖 鱊 鱒 鱒
和加佐幾 雀の魚

これらのすべてはワカサギの用語です。本書の著者 木村盛武氏は、これらに関して次のように述べています。「…このワカサギほど鳥の名にあやかった魚はどこにもいない。一般用語が若鷺なら、類語の尼鷺、白鷺、鷺、雀魚と鳥づくめである。…」

ワカサギの学名は *Hypomesus olidus* ワカサギ科（別名キュウリウオ科）です。

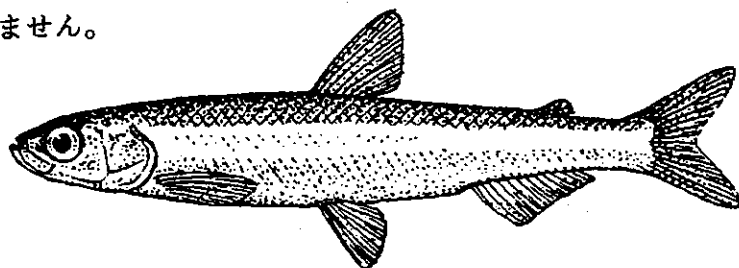
もともとは北日本にいたものですが、全国各地の湖・沼に移殖されていきました。またサケ、マス、アユなどと比較的的近縁で、あぶらびれがあり、汽水にも淡水にもすんでいます。ほかに縁が近いものに チカ (*H. japonicus*) 石狩川の旧河川にすむイシカリワカサギ (*H. sakhalinus*) 北海道太平洋岸のシシャモ (*S. lanceolatus*) がいます。

「日本産魚類検索全種の同定」（東海大学出版会）によると、日本の近海には3600種あまりの魚類がすむといます。本書「北の魚博物誌」に収録し解説した魚介類は64種ですが、私たち北海道に住む者にはなじみのあるものばかりです。解説の中心は魚介類の呼称に関する記述ですが、前書きに「…標準和名でどこの誰にも通ずる魚介名はきわめて少ない。極端な例では、メダカのように4794もの異称をもつものさえ

ある。魚介名の理解を惑わせ、ときにはトラブルを起こす一因に異称の乱立がある。

とはいえ、方言には郷土色豊かな伝統があり、一概にはいえないが…」とありますが、著者は一般用語や類語とその語源について興味深い解説をしています。

1月下旬の穏やかな天気でも、氷上でのワカサギ釣りは体にこたえます。エサをつける指先がということがきかなくなり3時間ほどで切り上げました。すぐそばの篠津温泉で冷えた体を温め帰路につきました。晩の食卓にワカサギの天ぷらがあったのは言うまでもありません。



ワカサギ *Hypomesus olidus*

第13回定期総会並びに懇親会のご案内

日 時：平成10年4月11日（土）13:00~19:30

場 所：「かでの2・7」10階 語学研修室 研修会、総会

「ユック」北1条西5丁目 興銀ビルB1 懇親会

受 付 13:00~13:40

研修会 13:40~14:40

演題 「北限のブナ林」 講師 川端 功治 氏（札幌市）

総 会 15:00~17:00

懇親会 17:30~19:30

年一度の研修・総会・懇親会です。多数の会員参加を期待しています。

《笹・ささ・ササ》

札幌市 川 端 功 治

裏山に登り30㌢位の積雪を掘り下げ、笹がどのような姿で埋もれているのか調べていたら、声を掛けられたので、ふざけ半分に東北訛りを真似て、「スズコ探しだ」と答えたら、「まさか、今どき」と叫んで犬に曳かれて走り去った。どうやら意味が通じたようで、かの人は東北に御縁がある方と独りがてんして気分を良くする。

東北地方では筍で美味しいのは、チシマザサ（ネマガリダケ）筍が最高と称賛する。北海道でも筍と云えば（チシマザサ）に限られ、移入の孟宗竹は食材に過ぎなく、季節を味わう味覚の王様はチシマザサと褒め讃えております。

この筍を東北では「スズコ」と愛称するのは（スズタケ＝細い筍）のスズとタケノコが合成されて、スズコになったのだとされています。

昔中国の三国時代呉の人で、母の求める筍を雪の中から探しだして、母に捧げたと云う孝行物語に比べて、私がやっていることは、はるか低次元の、スコップを振り回して雪をはねのけて、笹の根を掘り出し眺め独りで喜んでいるだけのことですが結構おかげで笹の根元が曲がっているのは、雪圧の所為では無いと云う事が、良く判りました。今まで迂闊にも雪に押されて、根元が曲がったのだと思い込んでおりましたが改めて良く見ると根茎の伸びる方向に発芽成長し次第に上方に転ずるので、始めから曲がっていて、強い圧力に良く耐える事がその型から判断出来ます。

クマイザサは5分位雪に覆われていて、露出した葉は半枯れの状態。その枯れた様はさながら縁取りしたようで、これなら隈笹と呼んでも良いのではないかと云う人もおりますが、これだけで隈笹と名前を付けるのは些か無理が有ると思います。

公認されたクマザサは、京都の近くに僅か野性のが在るだけで、流通している商品の隈笹は全て栽培種であつてお正月の門松の飾り、お祝い品の飾り物、神前用に使用

されてお馴染みなのですが、その縁取りは鮮やかな白色で、しかも決定的な差は遺伝子に組み込まれた色彩の白であるから、環境、天候、に支配されずに発色します。

これに反して他の笹は寒風害や、乾燥害等環境刺激によることが多く、色も枯れ葉色で冴えないし、要するに枯葉の一部ですから傷み易く持ちも悪いのです。



クマザサ

[九枚笹]



九枚の笹の葉を
図案化したもの

紋所の名。



ミヤコザサ

尚圧倒的なシェアを誇るクマイザサの語源を整理してみると、九枚の笹を組み合わせた家紋に有るようです。九は一から始まった数字の最高の位置にあり、縁起を担いで九枚の笹でデザインした構図は良いバランス感覚を思わせ、中々の出来映えと思います。それでこの製作に採用された笹をクマイザサと呼ぶようになったのでしよう。

そうすると笹の一枝の葉を数えて7枚しか無かつたとか、ついに9枚のを見つけたのは大発見等のネイチャーゲームは、いささか迫力を欠くことになりましょう。

別話題ですが熊笹と云う呼び方ならば大いに関心があります。さも熊が潜んでいそう
そんな笹藪、カーブでバッタリ出会いそうな笹竹の叢り。ムシャ、ムシャと笹を食べ

るパンダ熊は、子供ならずとも仲良しになりたい親近感を覚えます。

熊は冬眠に入る前や、冬眠から醒めた時にはタップリ食べるのが笹。だから熊笹と呼んでなぜ悪いと開き直る人もいます。熊笹ホイサツサと歌うクマも熊さんです。

古来から米をクマと呼んでいる地方があるそうで、供米（クマイ）が語源らしいと云いますが、熊野とは米が採れる平野で、熊谷とは米の採れる溪谷なのだそうです。隈本では田舎の意味ですから熊本に改名された等の経緯は詳しく知りたいものです。こうなつたら一層のこと、隈も熊も発音は当然クマとして、活字はその場の状況に応じて隈か熊にする。もしくは単に笹の一言でも宜しいとなればグーツと楽になります。自然観察会で自分の体験談を熱心に御披露している方の話しの腰を折らないで、旨くリードするテクニックは無いものかと考えた苦肉の策とご理解願います。

北海道に分布する竹類（成長するに従い皮が離脱するもの）笹類（皮が離脱しないもの）で一般に知られている種類は、栽培品を含めて次の通りと思われます。

記

- | | |
|--------------------------------------|----------------------|
| 1 モウソウチク（函館 松前） | 2 ハチク（伊達） |
| 3 アズマネザサ（アズマシノ、シノ） | 4 ミヤコザサ（エゾクマザサ） |
| 5 オオクマザサ（エゾミヤコザサ） | 6 チュウゴクザサ（カラフトザサ） |
| 7 オオバザサ（キタミコザサ） | 8 ホロマンザサ（ウラゲカラフトザサ） |
| 9 ミヤマザサ（オクミヤコザサ） | 10 ヤヒコザサ（エゾノウツクシザサ） |
| 11 シコタンザサ（アイヌザサ エサシザサ クシロザサ クッチヤロザサ） | |
| （メアカンザサ） | |
| 12 オゼザサ | 13 イブリザサ（ナガバオオクエゾザサ） |
| 14 チマキザサ（ホロノベザサ ソウヤザサ ヤチザサ シレトコザサ） | |
| 15 ルベシベザサ（チシマチマキ メクマイササ） | |
| 16 クマイザサ（オクエゾザサ） | 17 フシゲクマイザサ |
| 18 チシマザサ（トマリダケ コバノネマガリ テシオネマガリ） | |

19 エゾネマガリ (ヒロハネマガリ)

20 オクヤマザサ (アオネマガリ アオチシマネマガリ シコタンチク)

21 エゾミヤマザサ

22 ツクバナンブスズ (ヒロハノキタミスズ)

23 イブリザサ (エソナンブスズ)

24 オオサキザサ (チトセザサ チトセナンブスズ)

25 スズタケ (スズ ジダケ)

26 シヤコタンチク

以上の他に尚10種位あるようで、統合の動きもあるらしいから、お願い願わくば一般人にも判りやすい解説図解付きで公表願いたいものです。

笹の根をどうひねくりまわしてみても、見当もつかない出来事で、ある年突然に一斉に開花して結実し、見事に枯れ果て仕舞う仕組みは、どうなっているのだろうか。広々とした緑一杯の視野の中に、忽然とあらわれた枯れ野原には、ただ驚くばかりであります。

普通林道や歩道の縁に笹の花や実を着けた姿を見かけると、刈り払いと云う迫害に耐えかねて、死に花を咲かせて、子孫を残そうとする健気な姿と理解はしているけれども、広々とした枯れ笹原には誰でも足を止め、その異様な風景に啞然となります。もしかして薬剤でも散布したのか、病虫害が集団発生したのかと訝ること請合いです。

この集団自決のような異様な枯れ方については、色々な見解が有り集約してみると

1 周期説 60年、120年を周期とする

2 病菌説 寄生菌

3 地味不良説 旱魃

4 養分不良説 土壌分析

5 環境説 草焼き 傾斜地の乾燥

6 C/N率開花説 花芽を形成するのに必要とする炭素化合物は数10年の周期を必要とするが途中で環境の変化等刺激があれば開花することがある。

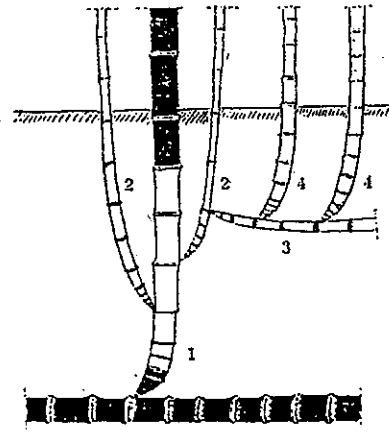
7 野鼠対策説 何拾年毎の豊作にすれば一時的な鼠害で済む。

8 DNA 遺伝子に組み込まれている。

アメリカに輸出した笹が、ある年突然枯れたところ株分けした日本の株も同時に枯れた事実が証拠。

開花して枯れた竹類の
回復する模式図

桿や根茎が枯れても、桿の
末端の一部が生き残り再び
成長を始め5 - 6 年で元に
戻る。



開花竹から若返る順序
1は開花竹で黒く塗ったところ
は開花後に枯死した部分。2は
開花竹の生存部から出た回復竹。
3ははじめて出た地下茎。4は
その竹筴。

思いがけない大量の開花、結実で、凶作がもたらした飢えを凌いだ史実があり、東北地方地方に限らず全国的な救荒植物として笹の実は重用視されてきました。

唄 会津磐梯山は 宝の山よ

笹に黄金のエーマタなり下がる

米は通貨並みに流通し、お上の統制下にあつて各藩の財源でもあつたから、笹の実
は競つて採取し、何俵も天井に吊るし数年の備蓄に備えたとあります。美味かどうか
試食でもしてみようかと云う方がいたら、麦角の混入に注意しなければなりません。
それは麦や笹の実に寄生する子囊菌の一種で黒い角状。誤食するとアルカロイド中毒
を起こす恐れがあり、漢方では墮胎、陣痛促進に調剤されると云います。

北海道では終戦前後に国策振興にニセコのチシマザサが硬質繊維板の適材としてク
ローズアップされ、岩内町に製造加工工場がオープンしましたが笹の集荷工費が高み

コスト高をカバー出来ず、ついにクローズされたのは残念なことでした。

初夏の珍味に笹の芯葉をお薦めします。笹の葉の頂上にクルクルと巻いている芯葉をポンと引き抜き、丸く結び衣を付けてテンプラに揚げます。美味は勿論のこと栄養評価はビタミンB、C、K、カルシウムが特に豊富とのことです。

その他笹茶やクロロフィル剤、食品包装等みるべきものも無く、笹の分布の広さの広大さやポリウム^①の巨大さとは比べようも無い微々たるものです。

未利用資源として未来に賭けるのか、森林に更新する壮大な夢を模索する方向で検討するのか、はたまた大北海道を覆うグランドカバーとしての効用を名目に、このままずるずると次の世代に持ち越すのか、節目のような気がいたします。

越冬笹の模式図

ポイント

ミヤコザサ (A)

a (冬芽は根元)

b (1年で枯れる)

チシマ、クマイザサ (B)

a (雪中の冬芽)

b (冬芽は枝葉になる)

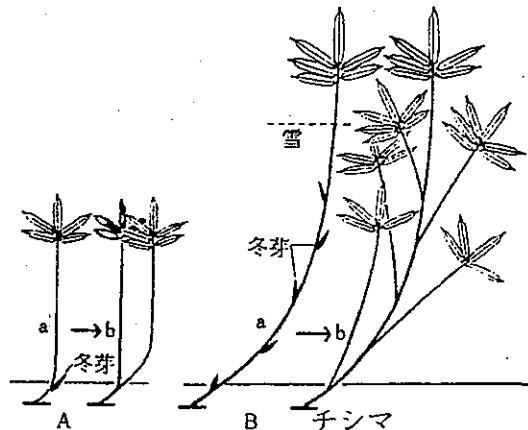


図2 ミヤコザサ群(A)とクマイザサ群(B)の生活形。a. 初年生のササの秋から冬の形態 b. 翌年の夏の形態

出典 日本の野性植物 平凡社

原色日本植物図鑑 保育社

植物の生活誌 堀田みつる

竹と笹の話 室井ひろし 北隆館

大辞泉

小学館

ボランティア・レンジャー協議会の発展を願う

－会の活性化へ向けてのやぶにらみ論－

札幌市 田村 允郁

はじめに

北海道ボランティア・レンジャー協議会は11年間の活動の歴史を刻んできました。この間、会を支える会員の協力体制があったからこそ、本会の存続があったものと思いますが、活動の深化とさらなる発展は会員各位が望むところでしょう。

ところで、本会の会則第2条（目的）に「この会は会員の自然観察及び自然保護に関する意識の高揚を図り、自然解説等を通して自然保護思想の普及啓発に務め、関係機関と協力のもとに将来にわたって北海道の自然環境の保全に寄与するとともに、併せて会員相互の親睦を図ることを目的とする」とあります。このことをまとめると、①会員が会の目的達成にむけて意識の高揚を図る、即ち研修活動を行う

②その発展として観察会の事業を行う

③そのために関係機関との協力連携を図っていく

④そして会員相互の親睦並びに信頼関係を築く となります。

近年、自然に関する知識や情報の増加そして自然観の変化と多様化が顕著です。

本会も時代の変化に対応しつつ、会の目的に沿う活動が求められています。そこで、本会の活動の活性化と発展を願って、幾つかの私見をできるだけ客観的データに基づいて述べてみたいとおもいます。

1. 組織ということ

本会の会員は、現在179名（1998.3.17 領録による）です。これらの会員は全道各地で活躍していますが、支庁別会員数は次の通りです。

石狩	104名	渡島	7名	後志	7名	空知	7名	上川	8名
留萌	2名	網走	10名	胆振	13名	十勝	12名	釧路	6名
日高	2名	道外	1名						

北海道各地の人口密度からして石狩に会員が多いのは、当然と言えば当然でしょう。従って、活動の中核となる観察会はどうしても札幌とその周辺になってしまいます。そのことが止む得ない事なのかどうか検討を要するところです。

私たちが本会の会員として所属できるよりどころは、会則の第5条に述べられています。即ち「この会の会員は、ボランティア・レンジャー育成研修会の受講者で会費を納入した者とする」が、会員としての資格条件です。次の表は1期から18期までの育成研修会の状況と会員数です。

《各期の育成研修と会員構成》

期	年月日	場所	会員数
1	1986. 8. 29~31	千歳市支笏湖畔	16
2	1987. 8. 21~23	七飯町林業研修センター	5
3	1988. 7. 29~31	標茶町茅沼町菅頼いの家	6
4	1989. 7. 19~21	東川町旭岳温泉	9
5	1990. 7. 20~22	様似町アポイ岳	5
6	1990. 8. 3~5	野幌森林公園	11
7	1990. 8. 24~26	標茶町シラルト湖	5
8	1991. 8. 1~3	丸瀬布町いこいの家	12
9	1991. 9. 5~7	真狩村羊蹄青少年の森	10
10	1991. 10. 3~5	当別町道民の森	10
11	1992. 6. 11~13	芽室町新嵐山荘	8
12	1992. 7. 23~25	芦別市芦別温泉	5
13	1992. 8. 20~22	白老町ポロト湖	8
14	1993. 8. 6~8	厚沢部町山村開発センター	5
15	1994. 7. 29~31	美深町美深森林公園	8
16	1995. 8. 11~13	新得町東大雪荘	13
17	1996. 7. 19~21	月形町皆楽園はな工房	22
18	1997. 7. 18~20	積丹町総合文化センター	21
合 計 会 員 数			179

第1回から18回までの育成研修受講者は総計656名（会報38号及び18回受講者名簿による）です。そのうち会員として3月現在179名が組織されています。組織率でいうと27%、受講者4人に1人の割合で会員になっています。この数字が組織率として多いか少ないかの判断はわかれるところですが、問題は毎年多くの加入者がいる反面退会される方も相当いるという事実です。

退会される方々の理由はさまざまでしょう。①年令的なことや体力的なこと、②仕事や勤務日程との両立ができない、③自分の主義・主張とは異なる、④興味関心が薄れた、⑤会に所属していても得るところがない、⑥活動に参加したくても地域性で困難である、等々の理由が推測されます。①から③までの理由についてはしかたのないことです。仮に④から⑥までの退会理由であれば、会として考えていかなければならぬ事です。会費未納者は退会すべきとの論もあります。会則論から言えばその通りかも知れませんが、そこには会員一人ひとりのおもいを汲み取る姿勢の欠如を指摘しておかなければなりません。要は会員あつての組織であることを肝に

銘すべきでしょう。

次の表は各年度の会員数と地域別比率です。データが十分に揃っていないので大まかな変化を読みとっていただきたいと思います。

《年度別地域別比率と会員数》

61年	会員数 36名 (会報 №3 による)			
62年	会員数 62名 (会報 №7 による)			
	札幌市	石狩(札幌を除く)	札幌・石狩を除く地域	
5年	42%	15%	43%	会員数 150名 (5年度名簿による)
	(63名)	(18名)	(69名)	
6年	45%	11%	44%	会員数 146名 (6年度名簿による)
	(67名)	(16名)	(63名)	
7年				
8年	47%	11%	42%	会員数 150名 (8年度名簿による)
	(71名)	(17名)	(62名)	
9年	44%	11%	45%	会員数 159名 (9年度名簿による)
	(71名)	(18名)	(70名)	
10年	43%	15%	42%	会員数 179名 (10年度名簿による)
	(77名)	(27名)	(75名)	

上のグラフを見る限り確かに札幌を含めた石狩管内の会員数が半数を越える状況にあります。がしかし、だからと言って札幌とその周辺地域での活動に限定すべきではありません。全道各地での活動には、人的にも、費用の面からも困難を伴いますが、それを乗り越える努力は会を運営する役員会とその構成員である幹事の役割でなければなりません。

会報38号 10周年特集で、会の発展を願ってアンケートを実施した結果が掲載されています。集計結果のまとめに次の一項があります。「…札幌とその周辺に住んでいる方が多いことは事実ですが、全道的な組織です。各地の会員の参加が得られる場面設定の工夫と努力を考えるべきでしょう。…」会の活性化は、多数を占める地域からという多数原理はできるだけ排除していきたいものです。

2. 研修ということ

会則の3条(3)に「会員相互の資質の向上を図るため、研修会を開催する」とあります。「資質」という言葉を国語辞典で調べると「持って生れた性質や才能」

とあります。人間一人ひとりとはまったく個性的な存在であり、その中で個性を磨くことが人間成長の過程でもありますし、個々人の資質の向上にむけての努力姿勢でもあります。会員一人一人は自然に対する感性や創造性、そして知識理解力の違いがあります。この違いを会の組織の中で交流しあう、それが研修の場でもあります。また、そのことが会則3条(3)でいう資質の向上でもあります。

本会の組織として計画されている研修の場は三つあります。一つは年一回開催される総会に先だって行われる研修会です。二つには観察会の下見という場です。三つには広報「エゾマツ」で案内される研修会情報によって個々の判断で参加する研修です。

研修に関連して、先日退会された方の話を聞く機会がありました。それは「…本会の活動は研修活動が少なく、その事に失望した…」との事です。氏は、観察会の下見は研修会ではないとの主張でした。観察会の下見が研修ではないとの論には賛成しかねます。しかし、その主張には、耳を傾けなければいけない論拠がある気がしてならないのです。確かに、観察会の下見は会員の研修の場には成り得ますが、下見はあくまでも下見であり、主たる目的は観察会のためのものです。研修とはあくまでも会員のためのものであり、会員の資質向上のためのものですから、事業としての観察会とは区別すべき側面があるのかも知れません。

2月に、フォレストガイド養成講座修了者で組織する会に出席する機会がありました。日程の中で、出席者全員による実践交流会が2時間を越える時間で行われました。各自が自由なテーマで体験や情報を語る姿に研修という原点を見る思いがしました。本会には、樹木や野草にすばらしい知識と見識を持つ人、野鳥にくわしい人、気象にくわしい人、蝶の写真家もいます。また、救急救命士という専門職の人もありますし、たくさんの人材がそろっています。屋外での救急法の実技を学ばせてもらうのもよし、蝶の写真の撮り方を学ぶのもよし、参加してよかったという会員のための研修の場を設けることも大切なことです。観察会と下見一辺倒という活動にちょっと足を止めてみる必要はないでしょうか。

3. 観察会ということ

観察会は本会の主たる活動であり、事業でもあります。それ故、観察会については、自然の変化や自然に対する価値観の共通理解の上で観察会を企画する必要がある

ります。その基本姿勢は会則の目的に求めることができます。その上で観察会のメニューを決めていくべきです。

観察会のメニューとボランティア・レンジャーの役割に関して、エコネットワーク代表の小川巖氏の「自然解説の方法と技術－ボランティア・レンジャーの役割とは－」（第14回ボランティア・レンジャー育成研修会議資料）の一文があります。

「…ボランティア・レンジャーの役割が非常に狭くとらえられているのではないかという点だ。一人のボランティア・レンジャーが多数の参加者を前に花や野鳥の名を教えたり、自然解説をおこなうという枠組みからほとんど脱していない気がしてならない。…」氏は続けて「ボランティア・レンジャーを目指す者が、いつのまにか職人芸の泥沼にはまり込んでしまう傾向が強い点である。スペシャリスト（専門家）の道と言ってもよい。…」4年前の資料ではありますが非常に説得力のある論です。観察会場として特定の場所で継続していく意味は大いにありますが、同じパターン、同じメニューで観察会を企画すると、知らず知らずのうちにマニア的な解説や案内になっていきます。

前述の研修と連動させて言わせてもらおうと、研修の場ではスペシャリストの発想でもよいと思います。しかし、不特定多数の参加者の観察会にあっては、小川巖氏の言葉を借りるなら「ジェネラリストの発想」こそ大切にしていかなければならないでしょう。

同じ場所での観察会について触れておかなければならぬ事があります。本会のメインフィールドはご存知のように野幌森林公園です。ここを会場とする観察会は主催・協力を合わせて年間12回を数えます。会報42号に「森林生態系と共に生きるために～倫理的平等の概念の拡大を～」(会員 大槻日出男氏)のレポートがあります。その中で「…野鳥観察会、自然観察会、歩こう会、マラソン大会、スキー大会、そして森の中の音楽会です。森の動物や植物のために、主催団体は日程その方法について連絡しあい調整しているでしょうか。」と疑問を投げかけています。

そして氏は、「…私たちの意識や行動、組織やグループの協力関係、そして森の施設は多数の人々が森林にはいり活動するほど十分に制御されているとは思いません。」とも論じています。本会のメインフィールド「野幌森林公園」の観察会について、自然との関わりという観点で改めて考えてみる必要があります。

観察会の内容について、大変示唆に富む事例があります。それは、札幌市在住の会員、猪師勉氏の実践です。氏は6年前より自ら「自然体験塾」を主宰されていますが、会報38号にその経緯についての寄稿文があります。その中で、良き自然案内人として心しておかなければならぬことを次のようにあげています。

一つは、先生気取りにならないこと、二つには、自然保護精神は参加者一人ひとりに無理なく心の奥から湧きださせるもの、三つには、特定の人をつくらず自信をもって人に接すること、と実践活動に裏付けされた考えを述べています。活動内容も多彩で、野鳥観察会、植物観察会、山菜・キノコの観察会、薬用植物観察会、夏山登山観察会、冬山登山観察会、小学生の親離れ・子離れサマーキャンプ等々を企画し、精力的に活躍しています。これらの観察会の内容は、本会も大いに参考にしていかなければなりませんし、参加者のニーズの多様化を前提とした内容の工夫を凝らさなければなりません。例えば、ゴミを拾う清掃活動をしながらの観察会、森林浴を楽しむことを主とする歩け歩け観察会、ニセコの観察会では、沼めぐりコースと登山コースに別れての観察会等、メニューの工夫に知恵を絞ることも大切なことだと思います。

前述の小川巖氏の論の中に「見て、名前を覚えるというワンパターンではなく、遊ぶ、食べる、作る、歩くといった要素を組み合わせると一層プログラムが多彩かつ楽しめる」と観察会の内容とメニューの方向を示しています。

4. 広報ということ

表現ということは、自己の内面的、主観的なものを外へ向かってさまざまな手段方法によって伝えようとすることです。具体的な手段方法として、表情、しぐさ、話す、書くなどなどがあります。特に、話す、書くということは、人間社会の大切なコミュニケーションの手段です。表現 (expression) それは外へ向けて押し出すことであり、そのためには、外へ押し出すエネルギーが必要になります。書くということ、それは相当のエネルギーを必要とします。

広報誌「エゾマツ」は会員の方々の「書く」という作業によって支えられています。会員の方々が意見、主張、感想、報告、情報などを書くという表現方法によって原稿が「エゾマツ」に集約され、会員相互に還流されます。会員の方々に常々投稿をお願いしていることはこのような理由からです。

「エジマツ」に投稿されるということは、観察会活動に参加するのと同等の意味があると思うのです。このことをぜひ理解していただき広報活動に参画してほしいものです。

広報活動はまた、原稿をどう整理し、興味をもって読んでいただけるかという編集作業があります。編集のマンネリ化は、投稿される会員の方々の参画意欲を削ぐこととなります。会員のニーズにこたえる紙面作りに、いつも新鮮な気持ちで取り組むことを広報誌作りのスタッフに望みたいものです。

5. おわりに

ギリシャ時代初期の自然哲学派は、自然の営みに想いをよせ、自然の中にとび出し、自然の中に真理を問いかけました。自然（じねん）それは「おのずからしからしむる」ものであります。この自然に身をおくことの幸せに共感した人々が集まったのが本会の会員だと確信をします。

本会は特定のイデオロギーによって集まった会ではありません。自然（じねん）の世界に共感した人々の集まりだと思います。また、ボランティアという名を冠した会ですから、行政機関との協力連携は当然ですが、要は会員一人ひとりに支えられた会であることが前提でもあります。

アメリカの第16代大統領リンカーンは「人民の、人民による、人民のための政治」という民主主義の原理を示す言葉を残しました。振り返って、私たちの会も「会員の、会員による、会員のためのボランティア・レンジャー協議会」でなければならないと思うのです。



観察会研修会 情報

平成10年度(4月~6月)開催予定の自然観察会

◎ 旭川自然観察会

月 日 平成10年5月24日(日)

場 所 旭川市 神楽「外国樹種見本林」

上記の観察会を予定していますが、4月9日の総会で今年度の活動が決定しますので、具体的な内容が決まりましたら、改めてご案内します。

平成10年度北海道野幌森林公園事務所主催で

協議会が協力する自然観察会

◎ 4月の森の観察会 平成10年4月16日(木) 10:00~12:00

集合場所 開拓記念館前

(4月9日 下見)

◎ 春の森の観察会 平成10年5月17日(日) 9:30~14:00

集合場所 野幌森林公園大沢口

(5月10日 下見)

平成10年度の主催(共催)の日程は45号(6月中旬発行予定)に掲載する予定です。また、今年度は、地方で開催される各種観察会も掲載していこうと考えていますので、情報をお寄せください。

連絡先 〒 003-0865 札幌市白石区川下5条2丁目4-32

佐々木 幸夫 (TEL・FAX 011-875-6602)

平成10年度 ボランティア・レンジャー育成研修会

人と自然との橋渡し役をするボランティア・レンジャー（自然解説員）の育成研修会です。知人、友人にPRしてください。

日 時 平成10年7月17日（金）～19日（日）
場 所 日高支庁様似町 アポイ山荘・アポイ岳
費 用 宿泊食事費 18,000円程度
照 会 先 北海道環境生活部環境室自然環境課ふれあい推進係
TEL 011-231-4111（内線 24-367）

平成10年度の研修会が下記のように各機関・団体で計画されています。会員のみなさんにおかれましても積極的に参加してみてもはいかがでしょうか。

平成10年度グリーンインストラクター養成研修会とグリーンインストラクター専門研修会が、（社）北海道国土緑化推進委員会 〒060-0004 札幌市中央区北4条西5丁目 林業会館内 電話・FAXとも（011）261-9022主催で実施されます。希望者は北海道国土緑化推進委員会にお尋ねください。

平成10年度フォレストガイド養成講座（Ⅱ）美瑛市にある北海道立林業試験場と栗沢町において、10月6日（火）、7日（水）、8日（木）、9日（金）の4日間に、森林の仕組みと機能、森の動植物、森林レクリエーションなどの専門的学習をします。この他にフォレストガイド養成講座（Ⅰ）が同じく5月19日（火）～22日（金）に、森林の仕組みと機能、森の動植物、森林レクリエーションなどの一般教養学習がありますが、会員のお勧めコースは（Ⅱ）です。この養成講座を希望する場合は、事務局（〒003-0865 札幌市中央区南5条2丁目4-32 林業試験場）FAXとも（011）875-6602に、ご一報ください。折り返し「フォレストガイド養成講座受講申込書」を送りますので、〒079-0166 美瑛市光珠内町東山 北海道立林業試験場企画指導部普及課に。また、不明の点も同課にご照会ください。

自然観察指導員養成研修会を、千歳市支笏湖温泉 支笏湖畔休暇村で6月19日(金)、20日(土)、21日(日)の3日間で実施する予定。詳細な問い合わせは、(社)北海道自然保護協会 〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル内☎(011)251-5465をお願いします。

日 高 の 情 報

日高地方幹事 浅野正嗣

1. 日高の情報

5月から8月まで集中的にアポイ岳で開催します。開催目的は高山植物保護の普及啓発です。鮫島氏(自然環境研究室主宰)や高橋氏(アポイ岳の高山植物の著者)に解説をお願いします。出来ることなら、継続して参加して頂き、いろいろな種類の高山植物開花時期の移り変わりを体験して頂きたいと計画しています。さらに関係機関の同意が得られれば、観察会開催時に帰化植物の除去作業も行おうと考えています。

9月には、5月以降の参加者等をお願いして、ボランティアによる登山道の補修や案内板の整備を行います。

時間があれば遊びに来て下さい。お待ちしております。

5月9日	講演会	講師 鮫島淳一郎	アポイ山荘	14時から16時まで
5月10日	観察会	講師 鮫島淳一郎	アポイ岳	8時から15時まで
6月21日	観察会	講師 高橋誼	〃	〃
7月26日	観察会	講師 高橋誼	〃	〃
8月9日	観察会	講師 高橋誼	〃	〃
9月未定	ボランティアによる歩道補修等 アポイ岳			
10月以降	様似山道 その他			

問い合わせ 日高支庁自然環境係 電話 (01462) 2-2211 内線 2980

◎◎◎◎◎ 編 集 後 記 ◎◎◎◎◎

◆2年間の活動が終わろうとしています。この間、できるだけ多くの会員の声を掲載すること、環境に関する情報や観察会・研修会情報を発信することに心がけました。

しかし、編集の工夫や紙面構成については、情性に流れたりして工夫の余地がまだまだあります。これらの点を次年度の広報部に引き継いでいきたいと思います。会員の皆様には「エゾマツ」に対する協力を引き続きお願いいたします。

◆子どもが使う国語辞典を見ていると、「人」と「木」で「休」という漢字ができるとありました。人間がくつろぎ休める場所は、木がおおいに関係することを古くから人々は知っていたのでしょうか。まもなく、雪解け、そして新緑の季節がやってきます。今年は「休」という字を頭にうかべながら森林にでかけてみましょう。英語でもForest(森林)は for rest(休息のため)という意味があるのですから。

北海道ボランティア・レンジャー協議会
会報誌「エゾマツ」44号 1998.3.30 発行
発行責任者 大友 健
(表紙絵 広報部 三崎 篤)